

氏名	石井 拓洋			
ヨミガナ	イシイ タクヨウ			
学位の種類	博士（学術）			
学位記番号	博音第290号			
学位授与年月日	平成29年3月27日			
学位論文等題目 の展開一	〈論文〉 「アーロン・コープランド『アメリカらしさ』の革新性と映画音楽への展開一」			
論文等審査委員				
(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	西岡 龍彦
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	亀川 徹
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	丸井 淳史
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	福中 冬子
(副査)	東京学芸大学	教授	(教育学部)	畑中 佳樹

(論文内容の要旨)

本論は、20世紀のアメリカ合衆国〔以下、アメリカ〕を代表する作曲家アーロン・コープランドの1930年代から40年代の音楽活動について、歴史修正主義の観点から再考するものである。「アメリカ音楽の旗手」、あるいは「アメリカ全世代の声」とも称されるコープランドの、アメリカにおける今日の一般的な受容像は、1990年、生誕90年に際し、第101回アメリカ連邦議会上院において彼に贈られた賛辞にも読めるとおり、文化的及び政治的側面における保守的性格を帯びている。かかる受容の存在は、また、建国記念日の式典や海兵隊リクルート、または老舗大企業の広告など、アメリカの「保守」的性格の強い局面において、コープランドの響きが共にあることにも裏付けられる。

一方で、このような今日のコープランド像は、しかし、この作曲家の内実をどれほど伝えているものだろうか。近年のアメリカにおける当該研究領域は、コープランドの政治性をめぐる諸相を徐々に明らかにしてきた。なかでも特筆すべきは、1953年1月の共和党ドワイト・アイゼンハワー大統領の就任記念演奏会において、事前に予定されていたコープランド作品の演奏が急遽中止に追い込まれたり、また、その数ヶ月後には、赤刈りでしられた共和党上院議員ジョセフ・マッカーシーに召喚され査問を受けてもいる。つまり、これらはいずれも、「疑わしき共産主義への関与の跡を数多くもち」、国際的共産主義者である疑いに端を発するものであった。すなわち、今日では「アメリカそのもの」とも称される彼であるが、しかし、かつては連邦政府から非米活動分子とまで目された事実があった。これを勘案するならば、今日のわれわれの多くが想起する、コープランドの姿は、あるいは、すでに何か捨象された後の姿であるかもしれず、さらにまた、あらたな含意が社会的に構築されたあとの姿ではないかとの推測も可能であろう。

アメリカでの当該研究の先行事例において、コープランドの政治性に研究的視点が向いたのは、冷戦終結後であり、本格的な考察がなされるのは今世紀に入ってからである。なかんずく、日本国内においては先例がなく、十分な研究蓄積がなされていない状況である。

そこで本論では、今日的なコープランド像を相対化した上で、彼の主要作品が創られた1930年代から40年代を対象として、コープランド自身とその作品を歴史化し、それらを当時のアメリカの歴史社会的動向との関係のなかで考察した。それを通して、「現代アメリカ」の形成過程におけるコープランドの文化的側面での役割りや位置づけを明らかにすることを目的とした。また、コープランドやその作品を歴史のなかに位置づけて考察するための方策として、マルクス主義批評家のフレドリック・ジェイムソンにおける「政治的無意識」の視座を援用した。それは、コープランドは戦後、みずからの政治的言動を表明することを一切控えたためであり、そのなかで考察を進めるための適切な方途と考えたためである。

本論は、序章と終章のほか、全9章から構成される。第1章はコープランドを歴史的な脈のなかで考察するための予備的考察を行なった。彼の美学的信条が示される言及を精査し、西欧近代的視座ではなく、特殊アメリカ的な視座から考察する必要性を確認した。また、文化冷戦の視座を取り入れて、左派藝術家の戦後の受容の変化の事実を確認した。第2章では先行研究の批判的検討を通して、以降で本論が議論すべき3つの論点を抽出した。1つ目は、「現代アメリカ」の形成におけるアメリカ20世紀の革新主義の位置づけであり、2つ目は、コープランドの1930年代の活動における革新主義から受けた影響、最後3つ目は、彼の1939年以降の映画音楽実践と革新主義との関連である。以降の章はかかる3つの論点にしたがって構成される。

まず第3章では、1つめの論点を考察すべく、20世紀アメリカの革新主義運動の内実を論じ、このアメリカ独自の運動において、社会的矛盾の淵源たる二項対立を科学的知見で止揚していく「中間の道」の追求がなされたこと、統計学に基づく広告戦略によって、アメリカに、はじめて「庶民＝平均的アメリカ人」が現れたこと、そして、それらを通じて国力が増し、20世紀前半に「現代アメリカ」の素地ができたことを論じた。

第4章から第7章までは、2つ目の論点を考察した。第4章では、1930年代の彼の活動が、音楽的人脈のみならず、写真家アルフレッド・スティーグリッツを中心とするニューヨークの文化人サークルとの関連から多く影響を受けたものであることを論じた。第5章では、革新主義的理念に導かれ、彼がそれまでの「ジャズ」語法を再考し、ドイツ・バーデン・バーデンの音楽祭にふれた「共同体の音楽」を志向するに到る経緯を論じた。第6章は、彼の「アメリカらしさ」とは政治的保守から生まれたものではなく、「異端の副大統領」ヘンリー・ウォーレスにも通じる左派的政治運動と関連する革新的な土壌から生まれたものであること、そして、1935年を境に彼の「アメリカらしい」音楽的表象、すなわち「パストラル語法」が確立されるに到る直接の契機には、モスクワから発せられた「人民戦線」に多く拠ることを指摘した。第7章では革新主義的動向と、「共同体の音楽」への志向の帰趨の一つとして、彼が映画音楽の地平に可能性をみたことを論じた。

第8章と9章では、上記3つ目の論点に触れ、コープランドの映画音楽実践と革新主義、および「共同体の音楽」への志向との関連を考察した。第8章ではドキュメンタリー映画『都市』（1939）を取り上げ、間テキスト性において、その音楽テキストを分析した。そこでは、「パストラル語法」によって「アメリカらしさ」が表現されているとともに、革新主義の信条をもつ彼が、真に解決が困難な社会問題に対峙するとき、その象徴的解決行為として不協和音が現れることを明らかにした。第9章では、映画『廿日鼠と人間』（1939）を取り上げた。ここでは「パストラル語法」が、その表現やその社会内での成熟を経て、ついに19世紀的なアメリカの表象にも適用され、本来は「未来」にのみ消失点をもつ革新的なるその語法が、遡ってアメリカの過去にもまた投射されることで、ヴァン・ワイク・ブルックスのいう「役に立つ過去」を形成していることを指摘した。

終章では、考察のまとめとして、革新主義によって現れた「現代アメリカ」の中で活動するコープランドの位置づけを、ヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」と、ヘンリー・ウォーレスの「庶民の世紀」とを対比を通して再定位した後で、「現代アメリカ」の形成過程において、コープランドが、音楽的側面における「役に立つ過去」を作る役割を担ったことを結論した。また、その後の冷戦期における彼の受容の変遷について論じた。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、1900年生まれのアメリカの作曲家、アーロン・コープランドの1930年代から40年代の音楽活動を歴史修正主義の視点から再考し、「現代アメリカ」の形成過程におけるコープランドの文化的側面での位置づけを明らかにすることを目的としている。

「アメリカそのもの」と語られる一般的なコープランドの評価について、政治的左派であり「革新主義」芸術家であったはずのコープランドの本来の姿が歪曲されていることに疑問を呈し、19世紀から20世紀の転換期のアメリカにおける社会的な問題（急激な工業化や都市化、大企業の市場独占による不平等、貧困など）に対して、新しいアメリカの基礎となる「革新主義」が果たした歴史的な役割（移民国家として文化の多様性を認めアメリカ的な共同体を形成したこと、平均的アメリカ人としての庶民の誕生）の中で真実のコープランド像を語るという申請者の意図は理解できる。また、論文の構成もそれに従ってよく考えられている。しかし、そのために必要な調査・研究領域が広がりすぎたことで、多くのリスクも引き受けることになってしまった。また、このような革新主義者コープランドの思想的表現が「共同体の音楽」として映画に関わることで実現していることを証明するための第8章と第9章（映画と映画音楽の分析）では、それらが十分に説明されているとは言い難い。学科の専門領域としては、第8章以下に重点が欲しかった。

作曲家である申請者の専門性を考えれば（また、自らの政治的信条を語ることが少なかったコープランドを扱うなら）、1930年代から40年代に彼が担当した映画音楽の分析を中心とした論文テーマを設定し、そこから「革新主義」芸術家としてのコープランドの真実の姿がどのように見えるのかという方法の方が相応しいように感じた。

様々な問題はあるが、コープランドに関する日本での研究が少ない中で意欲的にこのテーマに取り

組み、一定の成果をあげたことは博士論文として認めることができると判断した。